

講義名　問題解決の思考法

担当教員　神田　直弥

学籍番号　C1220408

氏名　梅原　朋春

学外からも羨望されるカフェテリアの考察

第一に「学外の人」の定義として、カフェテリアの利用が期待される地元の人に加え、将来の東北公益文科大学の入学希望者であると捉える。観察を通じて主な利用者とその利用法の分析を行い、また実際にカフェテリアを利用し、ユーザーの潜在的ニーズを踏まえて課題定義を行い、プロトタイプの提案及び期待される効果を考察したい。

まず観察を行った結果として、主な利用者は学生と教員であり、その利用法は学食での食事だった。学生に関して、食事以外の用途として、飲み物をテーブルの上に置きながら、個人学修や集まって授業外課題に取り組む姿が散見された。恐らく他の学内の教室や図書館と比べ、気兼ねなく飲食を行える開放的な空間であることが挙げられる。一方で最も人の出入りが多い平日の昼間は利用者は数日間観察してみてほぼ同じ利用者であり、同様に他の教室や外のベンチでもっけから購入した商品や持ち込んでいた軽食やお菓子などを摂取している人が確認できた。また学外の人間に至っては確認できたのは休日だけで、人数も二人組の団体だけだった。また喫茶店感覚で談笑していたその人たちのテーブルの上にあったものは、とびうおだしアイスが2つとセルフサービスの水が2杯だけだった。

次に自分自身が利用して感じたカフェテリアの利用用途は、観察したときと同様で食事と気兼ねない学修だった。しかし自主学修を取り組むだけなら人目を気にしない分、現住所でも学習を行えることから、本講義の授業外課題のようなグループワークを行う際に多少騒がしくしても問題ない場所として適していると思った。学食に関して、学生向けに適正価格から値下げを行っているとは思うが、平日に一日一回400円のメニューを注文し続ける場合の金額は月9000円弱となり、授業料免除制度や奨学金制度を活用している学生の身としては高いと感じて利用を避けて一日二食に抑えたり、食べ物と飲み物一品ずつで300円程度で抑えることができるもっけを利用したりすることが考えられる。また学外の利用者の立場に立てば、価格に差があることに不公平に感じられる。故に前述の二人組はカフェテリア独自のメニューかつ値段の格差が20円と小さいとびうおだしアイスを購入したと思われる。また、カフェテリアにしては食券のメニューのドリンクのレパートリーが乏しく、室内に通常の自動販売機や紙コップの自動販売機はあるものの、学外の利用者からすれば、ペットボトルや缶の自動販売機を利用する場合は酒田市内一帯にある同じ量で格安のwith DRINKの自動販売機を利用すれば良い。100円未満の紙コップの自販機を利用するにしても前者と比べて量は少なく、限界効用を満たすには不十分であり、仮に2杯で満たすにしても140~180円ほどかかり学内のペットボトル飲料の価格に相当し、何度も購入するとなると損する気分になることが考えられ、結局水で済ますことになったと考えられる。また東北公益文科大学のホームページを参照してみても、学外の人にも開放していること、また営業時間に関して記載はされているが、メニューの内容や実際に学外の人が利用している様子の画像がないことから魅力がいまいち伝わらないと感じる。地域共生にしては、住宅街から遠い立地の悪い場所にあることから利用しにくく、訪れたとしても談笑相手がいなければ、元々大学の敷地内であることから居心地が悪いことが考えられる。

そして2024年5月23日にゼミの一環で裁判所訪問後、酒田市役所付近の「COFFEE 山椒小路」という喫茶店で樋口准教授にご馳走になった際に注文したカレーが1000円、ドリンクに至っては300円の価格であったものの、独自のメニューであり、味や量に至ってはおおむね満足であり、そのときはたまになら訪れたい気分になっていた。

即ち原価に人件費や材料費等が加算されたものであったが、限界効用を満たせる場合は高い金を支払ってもよいと考えられる。これを学外の人に当てはめると、平日は学生や教職員が使っているので利用しづらいことから、カフェテリアを利用するのならば休日であると仮定して、たまになら訪れたいという心理を働かせることが重要である。また食事に関しては、学内外で値段に格差が生じても消費したいと思わせるような喫茶店のような魅力を作ることが重要である。地域共生を目指すならば、老若男女が訪れるような仕組みづくりが重要だ。

以上のことより、学食を利用しない学内の人間は何らかの形で栄養を摂取していることから顕在的ニーズは学食の値下げ、またその潜在的ニーズは勉学に励むために空腹を満たしちゃんとした栄養を健康の為に摂取することが考えられる。また学外の人にとっては顕在的ニーズはカフェテリアの用途的に食事や談話を楽しみたいことであり、その潜在的ニーズは訪れるだけの魅力を知りたい、気軽に訪れたい、談笑相手も欲しいことが挙げられる。

プロトタイプの提案として、コンセプトは前述の潜在的なニーズを満たすことであり、そのプロダクトとは、学内の人向けに 100 円朝食の導入と並行した学食の値下げを行い、学外の人向けに地域共生を目指して、学食のメニューの追加、カフェテリアのホームページの改訂、市の広報の一部やに組み込んでもらえるよう市へ依頼、大学のスポーツ施設を中高の部活動または老人ホームの人などの団体受け入れ体制の整備、学内的人が少ない土曜日や日曜日にカフェテリアを定期的な催し物を開催する場として利用することである。まず前者の場合、学食の値下げを行うことは現在利用していない学生の人も利用する可能性があるものの、学食の経営的問題に関わることから、利益が出るよう利用者の利用回数を増やすための方法として 100 円朝食の導入である。早朝に訪れた学生やドミトリ一生に平日の間に利用させることで利潤を拡大させて、その分を昼間以降の学食の値下げを行う。それでも材料費の増大で貰いきれない場合は、これからは学費の施設整備費を増やしカフェテリアの維持費を拡大したり、大学の公立化に成功した際には市からの補助金の一部を予算にしたりする。後者の場合、まずメニューに関して学生と比べ高い値段であるとしても味と量に見合った独自性のある食べ物と色々な種類のドリンクを追加する。カフェテリアのホームページに商品の内容を追加したり、知名度を上げるために行った市を通じた宣伝を行うことによりカフェテリアを喫茶店のような感覚で訪れてもらうようにしたりする。何故スポーツ施設を団体向けに開放するべきなのかと問われれば、運動の後にカフェテリアを休憩のために利用してもらうためである。カフェテリアを催し物を行う場として利用する理由は二つあり、本部棟や教育研究棟と比べて、学内の人も学外からの人も気軽に立ち入れることが出来る場所であり、また催し物を開催することが叶うならば、参加する地域の人のコミュニティの形成や強化ができる、また学生も参加することで地域との交流を行うことができ、特に酒田市外出身の学生が参加した場合は新しいコミュニティを形成することで孤立感を無くしその地域に溶け込む足がかりになり、地域の人も定期的な催し物を開催する場があることで地域を活性化にもなることが考えられる。期待される効果は、前者は学内の利用者が増えることで勉学に取り組める人が増え、後者はカフェテリアの魅力が広めることで知名度を上げ、カフェテリアが地域の交流の場として活用することにより一層地域の人が集まりコミュニティを形成することで談笑相手を得ることが考えられる。

学外の人にうらやましいと思われるカフェテリアを実現するためには、元々の利用者のニーズに応え、そのより良いものとなったカフェテリアを、市役所や学校、老後施設など外部組織と連携して、実際に外部の人が体験できる機会を増やし、その人たちに更に外部へと伝えてもらうべきだと思う。学部内外を関係なく利用されることは地域共生にも繋がることが期待される。また入学希望者の場合でも、オープンキャンパス等を通じて伝えることが出来るならば、カフェテリアの魅力を知ることができ、この課題を達成することが期待される。

参考文献

- 東北公益文科大学、「施設整備」, 東北公益文科大学, https://www.koeki-u.ac.jp/facilities/new_century.html (参照日 2024 6/9)
- COFFEE 山椒小路, 「About COFFEE 山椒小路」, COFFEE 山椒小路, <https://sansyokouji.com> (参照日 2024 6/9)
- 酒田市, 「さかたまっぷ」, 酒田市, <https://www.city.sakata.lg.jp/shisei/shisetsu/sakatamap.html> (参照日 2024 6/9)